関西大学大学院外国語教育学会 NEWS　VOL.5

The Society of Kansai University Graduate School of Foreign Language Education and Research

発行日:2010/9　　発行者:外教学会広報通信委員会

この号の内容

1　はじめに
（齋藤榮二先生）
2　新役員紹介
3　修了生による
研究発表
4　論文体験談
5　あとがき
6　編集後記

「未来に向けて、頑張りましょう」

関西大学大学院外国語教育学会名誉会長
京都外国語大学教授　齋藤榮二

齋藤です。名誉会長という肩書きをいただきながら、さっぱり学会のために役にたっていないこと申し訳ありません。幸いなことに学会 News のおかげで、皆さんのご活躍ぶりは拝見させていただいております。わずか発足して数年たっただけですが、研究大会における発表の内容も質も絶えず進化していることを、本当にうれしく思っています。これも、同じ関西大学の外国語教育研究の場で学んできた一人一人の皆さんの精進のおかげです。そして、田尻利恵子さんをはじめとして、この学会の発展のために力を尽くされてきた「縁の下の力持ち」の役割を担ってくださっている会員メンバーの皆様がたや、院生の指導に当たられる先生がたのおかげです。

さて皆さん、今、世の中は激しく動いています。世界が混沌とした時代に入ってきています。経済の体制の行き詰まり、世界の政治状況の急激な変化、こういう時代にあって教育はどういう役割を果たさなければならないのでしょうか。5 月 30 日京都外国語大学の研究科主催による「これからの 10 年、日本の英語教育の方向を考える」というシンポジウムが開かれました。コーディネーター役の私としては、「できるだけ大きな地図を描いてください」とスピーカーの皆さんにお願いをしました。How to については、いろいろな学会で研究発表も行われています。私が問いかけようとしたのは、what for でした。私は、8 月 4 日中野サンプラザ（東京）における三省堂セミナーにおいて、今度は講演者の立場からこの問いかけに答えてみたいと考えています。今こそこの問いの投げかける重要性を考えなければならない時機はないと思います。皆さん未来の子供たちのために、一緒に考えませんか。

新役員紹介

幹事長　田尻利恵子

6 月 12 日（土）の 2010 年度総会にて承認を頂き、新役員が誕生いたしました。この場をお借りして、2010 年度より新役員になられた皆様をご紹介いたします。

総務委員会	塩田紗矢佳さん（現役 M 院生、スペイン語：平田ゼミ）
財務委員会	濱由依さん（現役 D 院生、ドイツ語：高橋ゼミ）
研究大会委員会	神道美映子さん（修了生、中国語）
監査	玄幸子教授（中国語）

心強い新たな役員の皆様が加わり、今後とも微力ではございますが、少しでも皆様のお役に立てる学会を目指して役員一同一丸となり、研究大会、研究会を進めていけたらと思っております。会員の皆様の変わらぬご支援、ご指導、そしてご協力を心よりお願い申し上げます。

2009 年度　第 5 回　研究会

2010 年 6 月 12 日(土)に関西大学尚文館で、第 5 回研究会が開催されました。その参加記事をご紹介します。

【第 1 部】修了生による修士論文・課題研究発表

①「英語学習における「つまずき」の要因」(修士論文)

山中由香（04M修了）

外国語教育学研究科 2 期生で修了後公立中学校に復帰し、この春定年退職しました。学会からもずっと遠ざかっていましたが、院生のとき、共に苦労し、お世話になった若き先輩、同輩、後輩の 3 人が研究発表をされると聞き、同じく現職公立中学校から院に来られていた鈴鹿さんと関大に足を運びました。

今回は今から修士論文や課題研究、博士論文を書く方々の役に立つようなとても懇切丁寧な経験談も踏まえた発表で、外部のいわば公式戦に挑む学会発表形式ではなくて、フレンドリーな雰囲気だったので、私のような研究からは遠ざかって用語も忘れてしまったような修了生にも、また研究のテーマは何にしようとまだ雲をつかむような院生にも身近に感じられたと思います。こういう学会はあまりないので、発表されたお三方に感謝いたします。

竹内ゼミの先輩で、火曜日のゼミ演習で毎週進捗状況を研究室で目の当たりに見させていただいていた山中さんの「英語学習におけるつまずきの要因」。やはり、まず第 1 に質問紙の作成にどれほどの研究と試行錯誤が必要なのか知りました。また被験者を数多く集められていること。これは現職で、しかも留学を目的としている特別な学校に勤務の強みであり、他の院生にも協力を呼びかけられる日頃のコミュニケーション力のおかげだと思います。大学のときにさわりもしなかった統計の分野、ＥＸＣＥＬで苦労していた私たちの隣で、ＳＰＳＳを本を見ながら先輩方が因子分析を何通りもやっておられました。外教は何でも初めてで誰かが教えてくれるわけではなく、院生同士と先生方との強いネットワークを駆使してお互いの研究を深化させていたと思います。私は先行研究も読めていませんが、38 年間いわゆる下町の「つまずいている」生徒が大勢いる公立中学校のしかも 3 年生を教えることが多かったので、実感として、結論として挙げておられる、①学習ストラテジーの知識不足、②モチベーションの低さ、③文法およびライティングの知識不足を感じます。2002 年からコミュニカティブな授業転換を推奨されながらも、勉強嫌い、英語嫌いで基礎ができていない（つまずいている）けどやっぱり高校へ行きたいという中学 3 年生に、文法・文型をコミュニケーション（自己表現力）に使えるように、覚えやすい［合言葉］にしたり、英作文などを試みています。日本人ゆえに深刻な英語学習の「つまずき」の要因は修復の方法も含めて今後も研究・実践される分野だと思いました。　（守　キミヨ）

②早期英語教育における英語の prosody 習得のための教材開発－子供の可能性を求めて－（課題研究）」

田尻利恵子（05M 修了）

発表者の田尻さんは、私が前期課程の２回生の時に入学され、いくつかの講義はご一緒することができました。その頃から明るくとてもユーモアのあるお人柄で、熱心に研究に取り組んでおられました。今回はご自身の課題研究レポート完成までを詳しく説明してくださったのですが、院生時代を思い出させる楽しい発表でした。途中で実際にお作りになった CD－ROM に合わせて参加者がチャンツをくちずさむ場面もありました。これから、論文ではなく、課題研究を提出しようと考えておられる現役院生にとってはとても参考になる発表だったと思います。特に、「教材作成だけでなく、レポート（作成にいたる理論的背景、手順、使用方法をまとめたもの）も書かねばならず、論文以上に大変かもしれませんよ･･･、調べたことの３分の２はレポートには書かず、整理して３分の１のみ使いました･･･、締切り月の１月は集中的に教材作成に携わり、締切時刻直前まで完成に没頭する毎日でした･･･」等、具体的に詳しく話してくださったことが、私が課題研究提出までに感じたことと共通しており、とても印象に残りました。２年ぶりに研究会に参加させていただきましたが、懐かしい院生の方々にお会いでき、発表に刺激を受けることができた１日となりました。（鈴鹿郁子）

③励ましの言葉のより良い使用法を求めて－クラスルームリサーチにおける使用実態とその効果（修士論文）」

杉田麻哉（04M 修了）

研究課題が EFL 授業における「励まし言葉」の「使用実態」と「好み」に関する調査報告ということで、私にとっては非常に新鮮な研究課題でした。というのは、私自身、外国語教育学研究科に入学するまで、外国語教育の分野に全く縁のない世界におり、この分野での知識が全く無きに等しい中、授業内で使用される「励まし言葉」に関する研究というテーマに、非常に目新しさを感じたのです。杉田さん自身、このテーマを設定するにあたり、非常に苦労されたそうで、最終的に修士論文のテーマとして設定出来たのは２年目の４月だったそうです。たくさんの疑問がある中、自分の研究テーマを絞り込んでいく、というお話の中で、修士１年目の私にとって最も印象的だったのは、「最終的にそのリサーチクエスチョンの示唆が外国語教育に対してどのように活かせるか、という implication が求められる」という言葉でした。今年４月に３年コースに入学し、以来ずっと、自分の研究テーマ設定を絞り込む作業に悩んでいる私にとって、今回の杉田さんのお話はふと原点に戻らせてくれる非常に有意義なものでした。（石野未架）

【第 2 部】

分科会Ⅰ「私の修士論文執筆体験談」

植木美千子（09M修了）

植木さんの体験談では、「研究とは何か」という非常に抽象的なテーマを、具体例を用いながらわかりやすく説明されておりました。特に、「研究の流れ」を「山登り」に置き換えるという点が、工夫されていて印象的でした。

体験談では、内容が三部に分かれており、第一部が研究の流れについて、第二部が学術的な観点を養うことについて、第三部が論文の構成について紹介してくださいました。博士課程前期課程 1 年生の方々にとっては、研究の始め方、データ収集の方法、またデータ処理と解釈の仕方について把握出来たことと思います。また、2 年生にとっても、論文執筆の際の注意点や執筆方法など非常に参考になる内容でした。体験談後の質疑応答も活発に交わされており、特にパワーポイントを使用してデータを可視化する方法について、意見が飛び交いました。

これから修士論文を執筆される方々の不安やよくある問題点を詳細に提示され、またその解決策を具体的に紹介されたこの体験談は、大変素晴らしかったです。

（浜　由依）

分科会Ⅱ「私の博士論文執筆体験談」

杉田麻哉（09Ph.D.取得）

杉田さんは2004年に修士号を、2009年に博士号を取得されました。博士前期課程では「励まし言葉」についてのご研究で修士号を取得、さらに博士後期課程に進学、「英語学習者の動機づけ」についてのご研究で、博士号を取得されました。博士論文を完成させるまでの道のりは決して平坦な道ではなく、並々ならぬ努力があったことが、発表から伺い知ることができました。

博士論文を提出するには、３つの条件をクリアすることが必要です。１）修了に必要な単位がすでに取得されていること、２）学術論文を３編以上出版していること、３）3回以上の学会発表があることです。杉田さんの場合は、条件をクリアするために綿密に年間計画を立て、学会発表と論文投稿を年１回コンスタントに続けたそうです。そうすることで、博士論文の元となる研究が出来上がり、投稿した数本の論文をつなぎ合わせて形を作っていったそうです。

博論完成の目処が立ってからは、事務的な手続きが山のようにあります。まず、聴聞会を開催することです。聴聞会開催申請書を開催希望日の１ヶ月前までに提出しなければなりません。聴聞会開催後は「博士論文計画書」と「提出用件申請書」を期限までに提出しなければなりません。計画書と申請書は見本どおりに書かなければいけないので、教務センターでフォーマットをもらうことができるそうです。博士論文を提出するときには、製本した論文と一緒に「博士論文提出書」、「論文要旨」、「研究業績一覧表」を提出しなければなりません。提出時に「研究業績一覧表」に載せた実物(プログラムのコピー等)をすべて提出しなければならないので、口頭発表時のプログラム等は残しておくべきだと付け加えておられました。博士論文提出の約２ヵ月後に口頭試験が実施され、３ヵ月後に学位が授与されます。

博士論文は論文執筆だけではなく、さまざまな手続きがあり、論文完成の目処が立ってから約１年を要します。杉田さんは大変計画的に条件をクリアし、見事に博士の学位を取得されました。ご本人の努力は言葉では言い尽くせないほど、大変なものだったと察します。睡眠時間を削ってでも一本でも多くの論文を読み、ひたすら書き続ける努力を怠らないことが大切なのだということが、杉田さんの発表を聞いて改めて身にしみました。

（船越貴美）

「修了生は今」

博士課程後期課程修了（09Ph.D.取得）
日本大学経済学部助教　薮越　知子

外教学会の皆様、こんにちは。修了生の薮越です。学部時代から通い続けた千里山を離れ、今春から東京の大学で助教として働いています。初めての専任職ということで、覚えることが山ほどあり、慌ただしい日々を送っていますが、周りの先生方や職員の方々に色々教えて頂き、また、明るく元気な学生達からパワーをもらって、毎日元気に過ごしています。これまでは大学院に通いながら、複数の学校で非常勤講師をしていましたが、現在、1 つの学校で自分の学生としっかり向き合うことができるので、日々とても充実しています。また、学内委員会や学部の英語教育カリキュラムに直接携わることで、勤務校に対して愛校心を持つようになりました。

大学の仕事に加えて、研究活動の方も心機一転はりきっています。現在、新しい研究プロジェクトや教材開発などに取り組んでいますが、壁にぶつかる度に、関大で学んだことを思い出し、なんとか乗り切っています。関西を離れたことで、皆様にお会いできる機会が減ってしまい、とても寂しいのですが、国内外の研究大会やセミナーで毎年お会いできるよう、仕事と研究を両立させてがんばりたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

「新刊お知らせコーナー」会員の宣伝コーナーです。

1. Yashima, T. (2009). International Posture and the Ideal L2 Self in the Japanese EFL Context. Dörnyei, Z. and Ushioda, E. (eds.), *Motivation, language identity and the L2 self*（pp.144-163). Clevedon, UK: Multilingual Matters.ISBN:978-1-84769-127-9
2. 沈国威・内田慶市 編著『近代東アジアにおける文体の変遷―形式と内実の相克を超えて』白帝社，5040円，ISBN:978-4863980198，2010年3月発行
3. 沈国威 著『近代中日詞彙交流研究―漢字新詞的創制、容受與共享』中華書局，76元，ISBN:978-101-07157-3，2010年2月1日発行 *中国で出版されます。
4. 内田慶市・沈国威　編著『言語接触とピジン―19世紀の東アジア』白帝社，6090円，ISBN: 978-4-89174-971-2，2009年3月発行
5. 明照典子、小林和代、神道美映子 著『基本の中国語を楽しく学ぶ　中国語一年生』好文出版，1600円，ISBN:978-4-87220-124-6，2010年４月１日初版発行

（編集後記）

Newsletter は今回で第５号となり、年２回のペースで発行することができるようになりました。Newsletter で会員間の情報交換の場を提供するために、「会員の宣伝コーナー」を設けました。近々出版を予定されている方、講演会の予定のある方、是非広報委員までお知らせ下さい。また、Newsletter の感想も募集しております。mail@kufler-s.jp まで、ご意見、ご感想をお寄せ下さい。（小南智恵･船越貴美）